

研究ノート

フィリピン・ビサヤ民俗社会における カ・主体・アイデンティティに関する予備的考察

—dungan の観念について—

関恒樹

1. はじめに

従来、島嶼部東南アジアの多島海域社会に関しては、人々の移動性の高さと島嶼間ネットワークの発達という点が、基本的特徴として指摘されてきた。本稿が対象とするフィリピン中部のビサヤ諸島域も基本的にそのような島嶼部東南アジアの地域的性格を共有する。本地域の、特に沿岸部において漁撈や交易に従事する人々の多くは、多島海域の空間を活用した季節的かつ循環的な島嶼間マイグレーションを展開する。さらに、人々は島嶼部に形成された複数の移住者集落間にネットワークを維持することで、広大な海域に広がる資源を活用し、遠方の市場を開拓し、生業のための新たなニッチを求めてきた¹⁾。本稿はこの様な地域的背景を有するビサヤ海域社会さらには島嶼部東南アジアにおける人々のアイデンティティ構築のあり様を明らかにしてゆくために必要となる、基本的な論点と大まかな見通しを述べることを目的とするものである。

上述の様な人々の移動性の高さをその特徴とするビサヤ社会におけるアイデンティティとは、複数集落に移住・分散した後も、一つの土地に繋がるものとしての「われわれ」と、そうでない外部者としての「かれら」との間に文化的に構築される意味のある境界線として意識される。さらにこの様な同郷者意識は、故郷と複数の移住者集落を含む広域な空間において、マイグラントたちが会おう様な他者との関係、相互行為の過程で醸成される。本稿の議論が念頭に置くビサヤの移動漁民社会において、その様な他者とは、家族・親族など最も濃密な社会関係で結ばれる人々をはじめ、同郷者の紐帯で結

ばれる漁撈集団構成員や船団所有者・網元、そして移動先でのホストとしての地元商人・漁獲仲買人あるいは政治的有力者などが含まれる。さらにこの様な通常の社会関係のレベルに入る他者以外にも、マイグラントの日常世界を構成する他者には、同一集落構成員でありつつも超自然的かつ呪的能力を所有するために周縁的意味付けを付与されている者、あるいは様々な精霊、そして故郷に祀られるカトリック守護聖人なども含まれる。ビサヤのマイグラント達の日常世界はこの様な様々な他者で構成され、彼らはマイグラント本人とその家族・親族を中心として、その外延に *taga ato* (同郷の者、われわれ)、そして *taga lain* (外部者) を有し、さらにその外延に周縁的存在としての呪的能力者、精霊、カトリック聖人など *dili ingon nato* (われわれのようでない者達) と呼ばれる存在を持つ同心円状の諸カテゴリーとして意識される。そして、マイグラントたちが移動の過程で出会う、この様な力関係を異にする様々な階層に属する他者との相互行為の中から、彼らの自己の観念、あるいは主体のあり方というものが構築されてくる。この様に、本稿におけるマイグラントたちのアイデンティティとは、同郷者意識のレベルと自己の観念／主体のあり方のレベルの双方を含み持つ概念として措呈される。

この様なマイグラントたちのアイデンティティを明らかにしていく上で注目する必要があるのは、彼らが上述のような様々な他者との相互行為においていかなる力関係のもとで、いかなる駆け引き、ネゴシエーションをおこなっているかという側面であろう。マイグラントたちのアイデンティティとは、当然そのような様々な他者との力関係に規定される。このことから、ビサヤ民俗社会における力の観念の検討、そしてその様な観念が示唆する自己の観念／主体のあり方の把握ということが、本地域における人々のアイデンティティ考察の準備段階として必要となる。その点に関して予備的考察を試みることが本稿の目的である。

以下ではまず、島嶼部東南アジア諸社会における力と自己に関する民俗観念について、主に文化人類学の分野からいかなる議論がなされてきたかをまとめてみる。そこでは、この様な研究に関して、フィリピンとそれ以外の東南アジア島嶼部の間には大きなギャップが存在することが指摘される。次に、フィールド調査から得られた資料と文献をもとに、東南アジア的力の観念と

類似しつつも非常に異なった表象のされ方をする、ビサヤ民俗社会における *dungan* の観念について検討する。最後に、*dungan* の観念が、ビサヤ民俗社会におけるどのような自己の観念／主体のあり方を指し示しているのかという点を指摘したい。

2. 島嶼部東南アジアにおける力の観念

島嶼部東南アジアの力の観念は、Benedict Anderson の 1972 年の論文「ジャワ文化における力の観念」において明確な概念化を与えられたといえる。Anderson はジャワにおける伝統的な力の観念とは、宇宙に充滿し、生気を与える、曖昧かつ神秘的・神聖なエネルギーであるとし、様々な禁欲的修行や瞑想によって蓄積される呪的な力の観念を明確にした。そこでは、宇宙に充滿する力と個人、とくに政治的支配者の生命力との内的連関が強調され、そのような観念がジャワ人の権力観・政治思想の中心にあることが示された (Anderson 1972)。

この様な概念化を与えられた島嶼部東南アジア的力の概念は、人類学の分野においても盛んに議論され、それはこの地域の諸社会における自己・人格、社会関係、さらに伝統的国家における政治秩序といったミクロからマクロに至るさまざまな諸相を規定する概念として取り上げられた。まず、自己のレベルに関わる観念としては、“cosmic potency”、“spirit essence”、あるいは“soul-stuff”などと様々に訳されてきた島嶼部東南アジア諸社会における民俗観念に関する議論がある。例えば、半島部マレーシアやジャワなどにおける *sumangat*、ボルネオのイバン族社会における *semangat*、インドネシア・スラウェシ島ブギス社会における *sumange* などといった、語源を等しくする諸観念がそれである (Skeat 1967, Endicott 1970, Winstedt 1982, Freeman 1970, Errington 1983, 1989,)。全ての個人に内在する霊力、あるいは気と類似した概念にも思えるこれらの諸観念は、人々の認識を構造化し、行動を方向付け、それぞれの民俗社会における人 (person) の概念を構成する重要な要素とされる (Errington 1983:546, 1990: 41-47)。さらに、これらの神秘的諸力は個人の健康と安寧をつかさどり、その霊力の強弱あるいは人体からの遊離・拡散が人の病、死、不幸などの災因として語られる。この様

な観念が存在する諸社会においては、それらの諸力の起源を説明する神話やコスモロジーなどが発達し、またこれらの諸力に働きかけ、強め、その拡散を防ぐことで人々の安寧を守り、災難を遠ざけることを目的とする諸儀礼が存在することから、これまで宗教人類学的研究の対象となってきた。さらにその様な観念とこの地域の神秘主義思想との結びつきも注目されてきたといえる。

また、上記の諸観念は、人間を始めとした全ての事物に内在し、それらのもに効用と活力を与えるが、その力の分布は均等ではなく、僅かな力のみ有していない者もいれば、非常に強力な力を蓄積する個人もいる。この様な力の分布の不均等状態の認識から、各社会における階層性が説明される。この様な力の蓄積は祖先から継承される貴族の血（「白い血」として表象される）・血統など生得的要因の他、瞑想や禁欲的苦行、あるいはやはり祖先から継承された様々な宝器（regalia）や護符など、力の宿るとされる特定の呪物の所有によって可能となるとされる。支配者や貴族の具現する力は、この様な観念とコスモロジーによって正当化される。島嶼部東南アジアにおける階層社会は、こうした力の不均等配分の観念によって支えられ、各個人はそれぞれに内在する力に相応した階層に属し、それぞれの上層と下層の人々に対して適切な行動様式、対人関係のとり方を身につけてゆく（Errington 1983:559）。

さらに、この様な宇宙と個人を結ぶ神秘的力の観念とコスモロジーに支えられた階層性が、いわゆるインド化、あるいはヒンドゥー化された東南アジアにおける伝統的王権あるいは宮廷社会の根底にあったということは明らかであろう。つまり、ギアツの論じた「劇場国家」ヌガラにおける「模範的中心」としての王宮あるいは王の体現する力や、オリバー・ウォルタースによって議論された「マンダラ政体論」における支配者“men of prowess”に附与された力などに関する古典的議論も、上記の諸観念と同様なものであるといえる（Geertz 1980, Wolters 1982）。

このように、島嶼部東南アジア地域の民俗社会において文化的に構築された力の概念は、個人・自己に内在し、そのような自己が階層社会において取り結ぶ他者関係を規定し、さらには伝統的國家の権力論・コスモロジーにま

で繋がるものとして議論されてきた。一方フィリピン研究においては、この様な力の観念は19世紀末から20世紀初頭に頻発した千年王国的反植民地闘争に内在していた理念という特定の史的コンテクストにおいてのみ議論され (cf. Iletto 1979, McCoy 1982, Hart 1967)、今日のフィリピン社会の日常世界においてそのような観念が構築される状況に注目した研究は皆無に等しい。この様な島嶼部東南アジアとフィリピンとの間に存在するギャップの原因として考えられることは、前者における自己の背景に存在した伝統的王権、植民地期以前からの明確な社会階層、それを支えていた体系的コスモロジーといった諸要素を欠いていたフィリピン社会に関しては、他地域において議論されたような力の観念は非常に曖昧で捉え所の無いものとして、考察の対象とならなかったということが考えられよう。しかしながら、以下の論述で示されるように、フィリピンのビサヤ民俗社会においては、島嶼部東南アジア地域における力の観念と一定の類似性を持つ観念が見出され、それは他地域におけるような体系的な権力思想やコスモロジーとは結びつかなくとも、ビサヤをはじめとしたフィリピン低地キリスト教徒社会における自己の観念／主体のあり方の一側面を示唆していると考えることが出来る。以下においては、ビサヤ社会におけるそのような民俗観念がいかに関与しているのかをフィールド・データと先行文献の検討から明らかにし、最後にそのような観念が指し示す自己の観念／主体のあり方、そしてそのような自己・主体が取り結ぶ他者関係の特徴を議論する。この様な手順を経て、冒頭に述べたような地域的特性を持つビサヤ社会さらには島嶼部東南アジアにおける人々のアイデンティティ形成に関する考察に対して一定の見通しを得ることが出来ると思える。

3. *Dungan*の観念の諸相

ここで検討するビサヤ民俗社会における力の観念とは、ビサヤ諸語で *dungan* と呼ばれる概念である。以下の検討から明らかになるように、この概念は力という意味の他にも、魂・霊・人格・気などの諸側面を含む多義的なものである。以下に筆者がフィールドにおいて始めてこの言葉を聞いた時のエピソードを紹介する。

1999年6月のある日、パラワン島中部のビサヤ移民集落において、私は二十代前半の若い漁師の妻 Ana と立ち話をしていた。Ana の両親のことに話が及び、彼女は「私のお父さんは私が6歳のときに死んだ。特に重病にかかっていたわけではなかった。アルブラリョ Arbularyo (民間治療師、呪医) の言うところによると、お父さんの死因は、私の *dungan* が強かったからだ、という。私の *dungan* はへびだといわれた。」そこで、私は「*dungan* とは何か」と尋ねた。Ana は「*dungan* とはわれわれ人間のようでないもの *dili ingon nato* で、人が生まれてくるときに一緒に生まれてくる双子 (*kaluha*) の様なもの。人は誰でもみんなこのような *dungan* とともに生まれてくる。」と答えた。その後、私は別の50代後半のセブアノ女性に *dungan* について聞くと、彼女は次のように語った。「人は皆誰でも母の胎を出る時にも一緒に生まれてくる双子 (*kaluha, abyan*) を持つ。実際にお母さんの胎内からでなくても、同じ場所で同時に生まれた物がその子の *dungan* になる。人の *dunagn* はいろいろで、ただの水の場合もあるし、あるいはサルの場合もある。しかし、私は、Ana の *dungan* がへびだというのは信じない。もしへびが *dungan* ならばなぜ Ana はあんなに貧乏なのだ。へびの *dungan* を持つ者は皆儲けがよく、簡単に金持ちになることができる。セブ市のガイサノ(ビサヤ・ミンダナオ島地域一帯に展開する華人系百貨店)やプエルトの NCCC (パラワン州都の百貨店) などの所有者の *dungan* はへびである。へびの *dungan* の力は特別で、人の成長とともにへびも大きくなる。人は彼の双子のへびの成長に合わせて、小屋を建て替えてやるのだ。」

このような語りからおぼろげながら見えてくるイメージは、*dungan* とは、誰でもが皆持って生まれてくる霊的な双子のような存在であり、飛び抜けた富の蓄積はその人の持つ *dungan* の強さ—特にへびによって表象される—と関連している、と考えられていることであろう²⁾。以下では、この様な *dungan* の観念に触れたいいくつかの文献と、それに関連するフィールド・デ

一タの検討から、この観念の性格をより明確にしてみたい。

まず西ピサヤ地方のキナライア社会において調査を行った、人類学者 Alicia Magos によれば、調査地において *dungan* は人の魂 (soul)、知性 (intelligence)、意志力 (willpower) あるいは自己の片割れ、もう一人の自己、アルター・エゴの観念などと考えられており、さらにこの様な *dungan* が弱い者は病にかかりやすい。そして日常において何らかのショックの経験、あるいは眠っている間などに *dungan* が人から離れて浮遊するということもあり、それが病の原因として語られることもあるという。この様に *dungan* は人々の病と健康を説明するための基本的概念となっており、先に述べた島嶼部東南アジア諸地域に見られた観念との類似性を示している。Magos の議論において特に興味深い指摘は、病は人々の持つ *dungan* の競合 (soul competition) によってもたらされる、というものである。つまり、より強い *dungan* の持ち主が意図はしなくともその眼差し、言葉、手を触れることなどによって、弱い *dungan* を圧倒してしまうことによって、病が生じると考えられる。そして、シャーマンの仕事は人々の *dungan* を守り育て、村人に健康と平和を維持する、ということになるのである (Magos 1992)。

次に歴史学者 Filomeno Aguilar の研究を見てみる。彼は、19 世紀、20 世紀のスペイン、アメリカの植民地期における西ピサヤ地方ネグロス島の砂糖産業の社会史を再構成する中で *dungan* の観念を論じている (Aguilar 1998)。彼は、従来の西ピサヤの地方史研究に対する批判から議論を始める。従来の地方史研究においては、19 世紀後半にアシエンダと呼ばれるサトウキビ・プランテーションがこの地域に形成されるやいなや、アセンデーロつまり農園所有者、資本家の絶対的支配に基づいた固定的階層社会が形成され、それがあたかも今日まで続いてきたような静的社会像が強調されてきた。しかし Aguilar の議論によれば、少なくともアシエンダ労働者たちの観念のレベルではサトウキビ農園社会の階層性というものとは決して従来指摘されてきたような固定的絶対的なものとは捉えられていなかった。むしろ当時のスペイン植民地下におけるプランテーション社会における階層性は、流動的・可逆的なものとして労働者たちによって捉えられていた。そして、その認識の背後に *dungan* の観念があったと Aguilar は論じる。つまり、当時のアシエ

ンダ社会の支配階級であったアセンデーロは取り分け *dungan* の強いものとされ、彼の地位と富は、その *dungan* の強さから由来するものとして労働者たちには捉えられていた。ここで重要な点は、Aguilar も先程の Magos 同様 *dungan* の観念が当時の民俗社会において喚起したイメージは、固定的な支配と服従よりも、*soul competition* という、相対的な力と力の競合状況であったという指摘である。しかも、その様な競合状況は、背後に善悪などの価値や性質を固有に有することのない、純粋な力と力の対決というものであり、さらに、その様な拮抗、対立の結果は、どちらに転ぶか、勝ち負けの予測のつかない、運のみが左右する抗争という、むしろギャンブル性を帯びたものとしてイメージされる。必然的に、その様な力と力の対決から生じる階層性は固定的な支配—服従関係としては捉えられず、むしろついていた者となつていなかった者がいることによる当然の結果であり、従って状況次第で上下関係は逆転することも当然あり得る。この様に、Aguilar によれば農園労働者たちの抱いていた *dungan* の観念は、流動的な階層性の認識へとつながり、さらに重要な点は、それが糖業における支配・被支配の關係に当面の正当性を付与する一方で、その正当性は状況次第での逆転、抵抗の可能性をも同時に孕んだものとして当時のアシエンダ社会の農園労働者たちの観念のレベルでは捉えられていた、ということである。

これらの文献における議論では、共同体における日常的な人々の相互行為は、さまざまなグラデーションを持つ *dungan* 同士の絶えざる拮抗、対立、競合からなるというイメージが提示されているといえよう。そしてその様なイメージは、筆者のフィールドにおける人々の語り、特に日常的に人々が経験する体の不調や病の説明からも見て取れる。つまり、その様な *dungan* 同士の拮抗の結果、どちらかに均衡が傾く、バランスが失われる、その様な状態が病の説明として語られる。そのような事例として、ここでは、ネグロス島南部の調査集落におけるアスワン *asuwan* と呼ばれるウィッチ、そしてブヤッグ *buyag* と呼ばれる妖術の観念、さらに毒を盛って人に危害を与えるとされるソーサリーに類似したヒロアン *hiloan* などの諸観念に関する事例を検討したい。

調査地において、アスワンはその超自然的力を、特別な食物あるいはシグ

ビン *sigbin* と呼ばれる小動物の授受を通して、その子供などの近親者に継承させようとする。しかし、近親者がそれを受け入れないと彼は病を患うことになる。調査地の村落においてよく知られたアスワンの家系に関する人々の語りでは、かつて既に年老いた女性アスワンが彼女の義理の娘にその力を継承させることを望んでいた。しかし、そのアスワンは彼女の義理の娘に対し、「お前は *dungan* が強いから (*isug kang dungan*)、継承させることができない。」といて、その代わりに結局彼女の末娘に継がせることになったという。その末の娘は、しばらくの間病を患ったが、結局母の力を受け入れることで病は癒えたという。

一方ブヤッグの観念とは、特定の人間の眼差し、言葉、何気ない挨拶や褒め言葉に宿る特別の力が病を引き起こすという邪視や妖術に類似する観念である。調査地においては、「例え通りすがりの見知らぬ人であっても、『*dungan* の強そうな人』に会ったら、まず先に自分の方から挨拶 (*bati*) しなければならない。見つめられたら見つめ返さなければならない。そして、とにかく何でもよいから話題を作って当たり障りのない会話を交わさなければならない。大事なことは、まず自分が相手より先にそうしなければならない、という事。彼の *dungan* に先んじなければならない (*dapat unahan mo sa dungan*)。そうしないと、自分が病にかかる。」と語られる。

さらにブヤッグとは多少異なる観念で、特定の物質を用いて他人に毒を盛り、病や死を引き起こすと考えられているヒロアンと呼ばれる存在がある。調査地においてヒロアンはトゥバ(椰子酒)や食べ物に毒を盛るのみでなく、単に相手の体に軽く触れたり、あるいは相手が座る長いすの反対側の端をたたきだけで毒を長いす伝いに相手の体内に盛ることもできるとされる。この様なヒロアンによると思われる体の不調をしばしば経験するある女性は「私の *dungan* は弱いからすぐに影響されてしまう (*hina ang dungan ko, dali matintal*)」と語る。そして、この様なヒロアンの力に対抗するためには、体をたたかれたらたたき返す、あるいは座っている椅子などに触れられたら、自分も触れることで送られた毒を返す、などという一定の方法に関する知識が村落内において共有されている。

この様に、調査村落における人々が日常的に経験する一見原因不明な体の

不調や病の経験は、村落内の親族、知人あるいは見知らぬ外部者などとの相互行為における、双方の *dungan* の拮抗、competition として捉えられ、弱い (*hina dungan*) が強い (*isug dungan*) に負ければ (*daog ka sa dungan, lupig ang dungan mo*)、その者は何らかの体調の不全、病にかかる、とされる。

これらの事例から想定できるビサヤ村落の日常のイメージとは、人々が様々に程度の異なる *dungan* の持ち主たちにとりまかれ、彼らと自らの *dungan* の強さを天秤にかけ、均衡を保とうとし、もしそれが不可能で相手の *dungan* に押し負けされそうになったときには、すかさずそれをかわすか、避けるか、あるいは出し抜き、先んじようとしているというものであろう。この様に、村という共同体内における対人関係は常に中立的なものとしては存在しえず、絶えず *dungan* 同士の綱引き状態が存在している、ということができるのではなかろうか。

さて、以上のように、ビサヤ民俗社会における *dungan* の観念は、個のあり方とともに、人と人との関係の結び方という側面に深く関わってくる概念であるといえる。ところで、先に紹介した Benedict Anderson のジャワの力の観念に関する議論では、「西洋における力の観念は、その蓄積、総和量は無限に増大可能なものと考えられるのに対し (例えば、今日の地球全体の力の総和量は 30 年前のそれに比べて格段に増加しているという具合に)、ジャワの場合、宇宙に内在する力の総和量は一定に保たれていると観念されており、そのため、ある特定の人、集団の力の増大・集中は、他方における力の減少・拡散を導き、それに左右される」と述べ、ジャワの力が、相対的 (relative) な観念であることを強調している (Anderson 1972:8-9,31)。この議論をさらに展開させたイギリスの人類学者 Fanella Cannell は、フィリピン・ルソン島南部のピコール地方における力の観念について、その総量が外的に一定に規定されているものとして観念される力は、いかなる形の二者の相互行為によってもその相対的な力の均衡関係は変化していくという、きわめて流動的、可逆的、そして关系的 (relational) な観念として措定される、と議論する (Cannell 1999)。これまで述べてきた *dungan* の観念も、この様な相対的あるいは关系的な観念として考えることが可能であろう。つまり、そこにイメージされているのは、島嶼部東南アジア諸社会における様

な明確な階層性を想起させるような上から下へという一方向的・不可逆的なベクトルを持つ力ではなく、むしろ村落内の日常における水平的な他者との相互行為の過程で、その都度構築されるような力である。そこでは、各個人がそれぞれ持って生まれてきた *dungan* を対抗させながら、その場その場のエンカウンターにおいて、相対的に強い力のもは弱い力のもを圧倒し従わせようとする一方、相対的に弱い力のもは強い力のものに取り込まれないようかわしてゆく。その様にして、状況次第でその均衡関係を転移させてゆく様な力の観念、そして他者との相互関係のあり方が見て取れるのではないか。つまり、ビサヤ民俗社会における自己は、島嶼部東南アジアの他地域に見られた様な明確な起源と正統性を附与された力の観念に支えられる固定的階層性の中に自らを見出すのではなく、日常的な相互交渉、駆け引きの中に身をおき、そのような過程の中から力の観念は後追的に構築されてくるということができる。

4. 結論

これまでの *dungan* の観念の検討から、そこに内在する相対的・関係的な力の観念が明らかになったと思う。それでは、そのような *dungan* を人格の中心に持つ自己とは、いかなる主体として存在するのであろうか。ここではその点を、ビサヤをも含むフィリピン低地キリスト教徒社会における社会関係についての従来の議論の流れを検討する中で考えてみたい。

低地フィリピンの社会関係に関する人類学・社会学による議論は、1960年代、'70年代以降、異なった階層間における互酬的パトロン—クライアント関係に注目してなされてきた。これらの研究では、農村社会における文化的規範・価値観に基づいた互酬的パトロン—クライアント関係が中心に議論されてきた。例えば地主と小作間に存在するコンパドラスゴと呼ばれるカトリックの儀礼親族関係や、タガログ語のウタン・ナ・ロオブ *utang na loob* (直訳すると内的な債務、意識すると恩義) の観念などの規範・価値観に基づいた互酬的関係を論じた Frank Lynch や Mary Hollnsteiner などの研究がある (Lynch 1959, 1984a, 1984b; Hollnsteiner 1963, 1973)。これらの研究においては、地主が与える農地の耕作権をはじめ様々な生存維持のための援助と引き換えに小作農から提供される忠誠と政治的サポートなどを具体

的内容とする互酬性が強調され、とくに農民が地主に抱く恩義の観念は、子供が自らを生んだ母に対して抱く如き、一生かかっても返しきれない恩義、といった文化的に規定された観念として考えられた。このような人類学者による議論はさらに当時の政治学の研究にも適用され、そこではこの様なパトロン-クライアント関係の垂直的2者関係の連鎖がフィリピン政治の構造を作り上げていると議論された (Lande 1965)。

これらの機能主義的影響の強い議論からは、異階層間の均衡状態が強調され、さらにそれが文化的規範に本質的に規定されているとされたため、静的・固定的な階層社会像が描かれることになったといえる。しかし、これらの議論からは、異なる階級・階層間における対立・抗争関係が説明できない。このような批判から生まれてきたのが、いわゆる「日常型の抵抗」論であった。この議論は、異なる階級・階層間に存在する対立・抗争に注目するが、あからさまな叛乱・革命といった事件ではなく、むしろ被支配階級が支配階級に対して行う偽装、怠慢、サボタージュ、逃散、あるいは中傷やゴシップなど、通常は表面化せず隠れたところで、また非組織的にはあっても農村の日常の底流に確実に存在する対立関係、あるいはヘゲモニーを切り崩してゆこうとする抵抗の形態が注目された。(Scott 1985, Fegan 1986, Kerkvliet 1991)。

しかし、このような抵抗論に対しては、被抑圧者、あるいは弱者を一枚岩的に捉えてしまい、実際には、当局におもねる者、物理的抗争に出るもの、あるいは全く無関心の者などの多様性を無視してしまう。さらには個人のレベルにおいてもこの議論は抵抗する主体という首尾一貫した存在を想定しており、そこには主体の抱える自己矛盾という側面を取り込んだ議論がなし得ないという批判が出てくることになる (cf. Ortner 1995)。

例えば、オーストラリアの人類学者 Michael Pinches は、マニラのスラム地区における労働者と雇い人、あるいは政府役人などの関係について、労働者個人は、同胞労働者たちとの連帯と同時に、その一方で支配階級へおもねることを通して得られる上昇への志向という2つの相矛盾するベクトルを内包させている、とする。そして、Pinches は、被支配階級の主体というものはこのような矛盾を孕んだものであり、彼らのアイデンティティは決して抵抗という行為によって首尾一貫しているのではなく、支配階級のアイデンテ

ィティに絡み合いながら、それとの弁証法的関係のもとで構築されてゆく、と主張している(Pinches 1992)。

この様なレジスタンス論に対する最近の批判を念頭において、調査地のピサヤ漁村における諸階層間における人々の相互交渉の一局面を見てみたい。調査地の漁村における網元、あるいは船主、そして彼らに雇われて船に乗る漁師達の間には、農村の地主と小作、あるいは農業労働者との間に存在するような階層性が見られる。一見すると、その様な網元・船主が漁村における政治経済的そして社会的力と威信を握り、確固とした上層階級の位置を占めているかのように思える。しかしながら、人々の語りに注目すると、漁村の階層性というものは必ずしもその様な確固としたものとしては捉えられていないことが理解できる。たとえば、多くの漁師達を雇っている船主は「漁師たちは皆、前回の借金を返す前に次の借金を要求してくる。それを断れば、あいつらはさっさと他の船に移ってしまい、こちらは人手が足りなくなる。漁獲の売上は殆どこの様な借金で消えてしまう。実際にお金を持っているのは船主ではなくて、漁師の方だ。」という。この様に、船主は、彼らの社会経済的力、あるいは社会的権威といったものの主張と維持は、コインの裏表の様に、彼らの下位の者たちへの譲歩と慮りによってのみ可能であるということを知っている。一方、漁師たちは船主の要求に従い、忠誠を尽くすことで何らかの利益を得る、しかしその忠誠は決して固定的なものではないという状況を、実際の漁場で見ると賢い魚の習性を指し示す様に、「餌は食べても、(釣)針はずせ(*tung-la ang paon, iluwa ang taga*)」と表現する。これは、漁村の階層性の中で、自らの弱い立場を認めることによって同時に交渉の余地を見出してゆくというアンビバレントな態度を示しているとも捉えることが出来よう。人々は異階層に属する力の程度の異なる人々との関係において、服従と抵抗、あるいは親和と反目という相矛盾する2面性を同時に内在化させている。この様な事例からは、漁村に限らず、低地フィリピン社会における階層性は、固定的・静的なものではなく、それぞれの階層を構成する主体に注目すると、かれらは様々な異階層の人々との相互関係において、テンション・矛盾を内包しつつ、しかし日々の生活を営んでゆくために関係を取り結んでゆかざるを得ない、このようなためらいがちな不承不承の連合 (*reluctant*

alliance) のアンビバレントな様相が明らかになる。この様な諸階層間の相互行為の性格は、本論で指摘した *dungan* 同士の拮抗状況のイメージを喚起させる。そして、同様に *dungan* の観念が示唆した如く、人々は相対的に他者との力関係の均衡を少しでも自己に有利な様に轉移させようと試みる。その様な社会関係の中にある主体とは、パトロンクライアント論が想定したような温情主義的な互酬性に基づく均衡的交換関係を結ぶ主体でもなく、現存のヘゲモニーを切り崩してゆこうとする一枚岩的かつ自由な抵抗主体でもない。むしろ、それは一定の階層構造に縛られつつも、意識的・無意識的にその構造における自らの位置を轉移させてゆく行為体としてのエイジェンシーの概念に近いといえるであろう (cf. 上野・毛利 2002 : 100-105)。

本稿においては、フィリピン・ビサヤ海域社会における人々のアイデンティティ形成を明らかにするための予備的考察として、島嶼部東南アジアにおける力の文化的概念との比較のもとに、ビサヤ民俗社会における *dungan* の観念に注目し、そこから浮き彫りになる主体のあり方を大まかに素描した。本稿の冒頭にて指摘したように、人々の高い移動性を地域的性格として持つビサヤ海域社会におけるアイデンティティは、マイグラントたちがその島嶼間移動の過程にて出会う様々な階層・カテゴリーに属する他者との相互関係の中から醸成される。今後は、その様な他者関係の諸局面において、本稿において指摘された主体が具体的にどの様な力関係を取り結んでゆくのかということに関する民族誌的データの分析が必要となるであろう。

註

- 1) ビサヤ (Visaya) とは、フィリピン中部に広がる島嶼地域の名称であり、同時にそこに居住する人々の総称である。セブアノ、イロンゴなどの下部集団を含み、フィリピン低地カトリック教徒社会を構成する主要民族言語集団となっている。ビサヤ漁民の島嶼間マイグレーションと生計戦略に関しては関 (1997)、Seki(2000)を参照。筆者によるフィールドワークは、セブ州を中心に 1994 年以降断続的に継続されている。
- 2) *dungan* の語義は、「共に何かの行為、動作をする同伴者」、あるいは「2人の人間が期せずして同一の動作をすること」などがある。

文献

- Aguilar, Filomeno. 1998. *Clash of Spirits: The History of Power and Sugar Planter Hegemony on a Visayan Island*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Anderson, Benedict. 1972. "The Idea of Power in Javanese Culture," in B. Anderson and J. Siegel eds., *Culture and Politics in Indonesia*, Ithaca: Cornell University Press. Pp. 1-69.
- Cannell, Fenella. 1999. *Power and Intimacy in the Christian Philippines*. Cambridge: Cambridge University Press
- Endicott, Kirk M. 1970. *An Analysis of Malay Magic*. London: Oxford University Press.
- Errington, Sherry. 1983. "Embodied Sumange' in Luwu." *Journal of Asian Studies* 43(2): 275-290.
- . 1989. *Meaning and Power in a Southeast Asian Realm*. Princeton University Press.
- . 1990. "Recasting Sex, Gender, and Power: A Theoretical and Regional Overview," in Jane M. Atkinson and Sherry Errington (eds.), *Power and Difference : Gender in Island Southeast Asia*. Stanford: Stanford University Press. pp.1-58.
- Fegan, Brian. 1986. "Tenants' Non-Violent Resistance to Landowner Claims in a Central Luzon Village." *Journal of Peasant Studies*, 13(2): 87-106.
- Freeman, Derek. 1970. *Report on the Iban*. London: The Athlone Press.
- Geertz, Clifford. 1980. *Negara: The Theatre State in 19th Century Bali*. Princeton: Princeton University Press.
- Hart, Donn V. 1967. "Buhawi of the Bisayas: The Revitalization Process and Legend Making in the Philippines." in Mario Zamora, ed., *Studies in Philippine Anthropology*. Quezon City: Alemar-Phoenix Press. Pp.366-396.
- Hollnsteiner, Mary R. 1963. *The Dynamics of Power in a Philippine Municipality*. Quezon City: University of the Philippines, Community Development Research Council.
- . 1973. "Reciprocity in Lowland Philippines," in F. Lynch and A. de Guzman ii (eds.), *Four Readings in Philippine Values*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Ileto, Reynaldo C. 1979. *Pasyon and Revolution: Popular Movements in the Philippines, 1840-1910*. Quezon City: Ateneo de Manila University Press.
- Kerkvliet, Benedict. 1991. *Everyday Politics in the Philippines: Class and*

- Status Relations in a Central Luzon Village*. Berkeley: University of California Press.
- Lande, Carl H. 1965. *Leaders, Factions, and Parties: The Structure of Philippine Politics*. New Haven: Yale University Southeast Asian Studies.
- Lynch, Frank, S.J. 1959. *Social Class in a Bikol Town*. Chicago: University of Chicago, Department of Anthropology, Philippine Studies Program.
- . 1984a. "Social Acceptance Reconsidered", in Aram A. Yengoyan and Perla S. Makil (eds.) *Philippine Society and Individual: Selected Essays of Frank Lynch, 1946-1976*. Michigan Papers on South and Southeast Asia no.24. Ann Arbor: University of Michigan Center for South and Southeast Asian Studies. Pp23-39.
- . 1984b. "Big People and Little People: Social Class in the Rural Philippines," in Aram A. Yengoyan and Perla S. Makil (eds.) *Philippine Society and Individual: Selected Essays of Frank Lynch, 1946-1976*. Michigan Papers on South and Southeast Asia no.24. Ann Arbor: University of Michigan Center for South and Southeast Asian Studies. Pp.92-99.
- Magos, Alicia. 1992. *The Enduring Ma-aram Tradition: An Ethnography of Kinaray-a Village in Antique*. Quezon City: New Day Publishers.
- McCoy, Alfred W. 1982. "Baylan: Animist Religion and Philippine Peasant Ideology." *Philippine Quarterly of Culture and Society* 10:141-194.
- Ortner, Sherry B. 1995. "Resistance and the Problem of Ethnographic Refusal." *Comparative Studies in Society and History* 37(1): 173-193.
- Pinches, Michael. 1992. "Proletarian Ritual: Class Degradation and the Dialectic of Resistance in Manila." *Pilipinas* 19:69-92.
- Scott, James. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. New Haven and London: Yale University Press
- 関恒樹 1997 「フィリピン・ビサヤ地方の移動漁民に関する一考察」『民族学研究』 62 卷(3 号) 294-314.
- Seki, Koki. 2000. "Wherever the waves carry us: historical development of a Visayan fisherfolk's livelihood strategies." *Philippine Quarterly of Culture and Society*, .28(2): 133-157.
- Skeat, Walter William. 1967[1900]. *Malay Magic: Being an Introduction to the Folklore and Popular Religion of the Malay Peninsula*. New York: Dover Publications.
- 上野俊哉・毛利嘉孝 2002 『実践カルチュラル・スタディーズ』筑摩書房

Winstedt, Richard. 1982. *The Malay Magician*. Oxford University Press.
Wolters, Oliver W. 1982. *History, Culture, and Region in Southeast Asian
Perspectives*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
(seki@hiroshima-u.ac.jp)